

桜蔭俳話会 十一月句会(第三〇〇回) 桜蔭会館

平成二十三年十一月二十七日

3点 大熊手小熊手それに百の素手 貞勝

乾電池入れ替え勤労感謝の日 貞勝

2点①流れゆく人は砂粒冬の川 守

①冬薔薇の土盛りあがる日和かな 秀一

①幼児らのつるつる下りる落葉土手 秀一

①走り根を跳んで幼なの日短 秀一

①絨毯の縁に沈思の胡坐かな 守

①冬菊や臓器提供やはり否 守

昔の如母と手つなく冬日和 友子

川石の流転の丸み下り築 貞勝

電車席ゆずられ素直小春かな 真三

小春日の当駅始発電車かな 守

父祖よりの木鉢の木目栗おこわ 幸

1点①行く秋やゆつたり進め牛のごと ヤエ子

十一月社友同期の喪中状 真三

頭を寄せて羅漢の談合小六月 貞勝

店前のすらり冬薔薇三つなり 真三

バス赤字気にせず乗りし。パス初冬 真三

葉隠れに我もありしとホトトギス 田鶴子

丘上の真紅の楢円秋落暉 幸

*古簾影鎮まりて揺れる萩

逡巡を切る黄昏やあかね雲 田鶴子

薦もみぢ宮の大樹を飾りゐる 友子

冬の川まなこ落として帰りけり 守

長き夜や時の刻みの遅きこと ヤエ子

少女らの歌声響く花野かな ヤエ子

銀座は早イルミネーション神の留守 友子

諍い後マウス揺する手固き口 田鶴子

飛石といふ布陣して神の留守 貞勝

冬の日に追はれ庭園巡りけり 秀一

子を抱く地藏まるしや山葡萄 ヤエ子

この夕日東北に届けと仰ぐ空 田鶴子

太鼓橋を越えたる先の冬紅葉 友子

冬暖か部屋で聞きたるのど自慢 真三

整地跡門残りたる時雨かな 秀一

街中の元宮邸や浮寝鳥

大仏のやさしき眼元秋気澄む

喪はがきの力なき字に冬便り

篆刻を未完の友は秋に逝く

友子

ヤエ子

幸

幸